



Data

監督: ジャマ・コレット=セラ
脚本: ジョン・W・リチャードソン、
クリス・ローチ、ライアン・
イングル
出演: リーアム・ニーソン/ジュリ
アン・ムーア/スクート・マ
クネイリー/ミシェル・ドッ
カリー/ネイト・パーカー/
ジェイソン・バトラー・ハー
ナー/アンソン・マウント/
コリー・ストール/ルピタ・
ニョンゴ/ライナス・ローチ

👁️👁️ みどころ

「密室モノは面白い」ことを、高度12,000mの上空の密室でも実証！
航空保安官がアルコール依存症というのはコンプライアンス上は大問題だが、
この男、意外にやるジャン！

犯人は誰だ！送金しなければ20分ごとに機内の誰かが死ぬ？そんなバカ
な！怪しげな乗客が、あっちにもこっちにも……。そんな中、ノンストップ
で進む犯人捜しのスリルとサスペンスは絶品だ。

さらに、犯人判明後の見どころは、趣を変えて別の視点からタップリと……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■こんな航空保安官でいいの？■□■

神ワザの操縦で多くの人命を救った大型ジェット機の機長は、実はアル中だった！そんな奇抜な設定で第85回アカデミー賞主演男優賞にノミネートされたのが『フライト』（12年）のデンゼル・ワシントンだった（『シネマルーム30』25頁参照）。しかして、本作にみる航空保安官のビル・マークス（リーアム・ニーソン）も、どうやらアルコール依存症気味……。さらに、NY発ロンドン行き旅客機に客を装って乗り込もうとしているビルの行動をみていると、心身共にお疲れ気味の様子。こんな健康状態、精神状態で勤務に就かせていいの？

本機に乗り込む乗客は146名だが、乗務員は欠員があるらしく、本作全編にわたって活躍する主任乗務員のナンシー（ミシェル・ドッカリー）とグウェン（ルピタ・ニョンゴ）の2人しかいない。しかも、出発前の機長と副機長カイル・ライス（ジェイソン・バトラー・ハーナー）の会話を聞いていると、「もう、あいつとやったの？」という不謹慎極まり

ないものだ。本機が、私が時々乗っている日本航空でも全日空でもないのが幸いだ、アメリカやイギリスの航空会社ってこんなにデタラメなの？

航空保安官という仕事は日本にはないはずだが、ビルのようなレベルの低い航空保安官ではほとんど役に立たないこと明かだから、いてもいなくても同じなのでは・・・？しかも、本機が離陸する時におまじないのひもを手を巻いて離陸の恐怖に耐えている姿を見ると、更にその感を強くしてしまう。これが『バットマン ビギンズ』（05年）（『シネマルーム8』127頁参照）はもちろん、『96時間』（08年）（『シネマルーム23』未掲載）や『96時間／リベンジ』（12年）（『シネマルーム30』未掲載）、さらに『タイタンの戦い』（10年）（『シネマルーム25』13頁参照）等で、強烈なアクションを見せつけてきた俳優リーアム・ニーソンのなれの果て・・・？

■怪しげな乗客がいっぱい！やはり密室モノは面白い！■

離陸した後、ビル専用のIT機器に送信者不明のメールが届いたから、やむなくビルは「この回線への侵入は連邦犯罪だ」と返信。ところが、それに対して「機内トイレでの喫煙も犯罪だ」と返されてきたからアレレ。一体、誰がどうやって俺の行動を監視していたの？さらに続くメールは、「指定の口座に1億5,000万ドル送金しなければ20分ごとに機内の誰かを殺す」というものだったから、ビルはビックリ。これは誰かのいたずら？それとも・・・？本作の原題は『NON-STOP』。これは上空12,000mを飛び続ける大型ジェット機の中で、ノンストップでスリルとサスペンスが続いていくという意味だが、本作のその後の展開はまさにその原題どおりだ。

飛行機に乗り込む前の手荷物検査は見慣れた風景だが、本作導入部では、窓側の席への移動を強引に要求する女性客ジェン・サマーズ（ジュリアン・ムーア）をはじめ、ひとくせもふたくせもある、怪しげな乗客が次々と登場してくる。2001年の9.11同時多発テロ以降はイスラム系というだけで怪しまれるようになったが、それにプラスしてあごの周りがひげもじゃなら、それだけでたちまち怪しそう。さらに、スーツを着ている男ザック・ホワイト（ネイト・パーカー）も怪しそうだし、タバコの火を借りるためにビルに話しかけてきたり、行き先を尋ねる男トム・ボーウェン（スクート・マクネイリー）も怪しそう。その他、『NON-STOP』という原題どおり、本作導入部は多くの怪しげな乗客の姿を見せつけてくれる。しかし、離陸した後はメールのやりとりしか見せてくれないから、ビルはもちろん私たち観客も、犯人像を絞り込んでいくのは極めて難しい。

■意外にやるジャン！でも、これでいいの？■

ビルがメール犯として最初に疑ったのが、同じ機内に搭乗しているもう一人の航空保安官ジャック・ハモンド（アンソン・マウント）だったのはやむをえない。だって、彼らの特殊な回線にメールできる人物は、関係者に限定されているのだから。しかし、ハモンドの

メールの送受信履歴を確認しても、ビルとの通信記録はない。そこで展開される、ビルとハモンドの現状認識と対応策は両極端で面白い。たしかに、これは誰かのいたずらだから大騒ぎする必要はない、というハモンドの考え方にも一理ある。しかし、やはり、現在の状況を正確に機長に報告するとともに、自分たちの所属する運輸保安局に通報して、乗客名簿を調査し、犯人捜しをするよう意見具申すべきというビルの考え方の方が正しいはずだ。しかし、ビルの考えたとおりの展開となったのは幸いだったが、問題はメール犯からもらった猶予時間は20分しかないのに、乗客名簿の調査には30分かかるということだ。20分以内に1億5,000万ドル送金しなければ機内の誰かの命が奪われるとしたら、ここはやはりひとまず犯人の要求どおりに……。

そんなこともチラホラ考えながら、ビルは隣の席で寝ていたジェンに頼み込み、ビルが送るメールに対して反応している客を探すと、どうもハモンドが怪しい。そんな中、ハモンドが席を立てて後部トイレに入ったため、「犯人はハモンドだ!」と判断したビルは強引にトイレの中に押し入り、ハモンドのケータイを取り上げて、受信履歴を確認しようとすると、ハモンドはこれに猛反撃。狭いトイレ内での激しい掴み合いの中、ハモンドは銃まで抜いたから、やむなくビルはとどめを……。そんな格闘技の達者さは『96時間』や『96時間/リベンジ』でみるリアム・ニーソンそのものだが、アレレ、結果的にメール犯の言うとおりに、1億5,000万ドルを送金しなければ、20分以内に機内の誰かが殺されることに……。



■□■振込口座の名義は何と！すると、ハイジャック犯は？■□■

機内に乗り込んだ航空保安官には、どんな状況下でどこまでの権限が与えられているの？それが正確にわからないのが本作最大の欠点（？）だが、少なくともビルがハモンドを殺す権限を持っているはずはない。したがって、正当防衛か緊急避難の要件を満たさない限り、ビルはハモンド殺しの殺人犯になるはずだ。また、乗客名簿の調査に30分かかるとは仕方ないが、そんな場合に、機内の航空保安官にすべての権限が集中するはずはないから、ビルは自分が所属する運輸保安局の指示を仰いで行動すべきが当然だ。したがって、ハモンドを殺した後、「やっちゃったな」と嘲笑うようなメールを受けたビルが、さらに乗客を拘束して荷物やケータイを調べるといった行動に出たのは明らかに違法といわざるをえない。

いくら本人は善意でも、こういう行動に出るから、去る7月1日に安倍内閣が閣議決定した「集団的自衛権行使の憲法解釈の変更」についても、「時の内閣が自由に解釈できることになるから危険」という議論が正当性をもってくるわけだ。さらに、弁護士として一番イライラしたのは、こういう場合の機長と航空保安官の権限の配分がわからないこと。そんな中で「犯人」から提示された1億5,000万ドルの振込口座の名義が何とビルのものだということが明らかにされたから、ビルはもちろん機長や副機長もビックリ！さらに、乗客名簿を調べた運輸保安局からビルに対して、「全員問題ない、お前以外は、お前を任務から解く」と通告されたから大変。それを知った機長は、その命令に従ってビルを拘束すべきが当然だ。ところがスクリーン上は、それとは全く違う展開に……。

そればかりか、狭い操縦席の中でビルと言い争った機長が何と「第二の犠牲者」になってしまったから、事態はより複雑に、そしてより深刻に……。ハイジャック犯はやはり、怪しげな乗客の誰かではなく、ビル自身……？

■□■「決起する乗客たち」の姿がここにも……。■□■

機内に乗り込んだ航空保安官には、どんな状況下でどこまでの権限が与えられているの？それが正確にわからないのが本作最大の欠点（？）だが、少なくともビルがハモンドを殺す権限を持っているはずはない。したがって、正当防衛か緊急避難の要件を満たさない限り、ビルはハモンド殺しの殺人犯になるはずだ。また、乗客名簿の調査に30分かかるとは仕方ないが、そんな場合に、機内の航空保安官にすべての権限が集中するはずはないから、ビルは自分が所属する運輸保安局の指示を仰いで行動すべきが当然だ。したがって、ハモンドを殺した後、「やっちゃったな」と嘲笑うようなメールを受けたビルが、さらに乗客を拘束して荷物やケータイを調べるといった行動に出たのは明らかに違法といわざるをえない。

いくら本人は善意でも、こういう行動に出るから、去る7月1日に安倍内閣が閣議決定

した「集団的自衛権行使の憲法解釈の変更」についても、「時の内閣が自由に解釈できることになるから危険」という議論が正当性をもって来るわけだ。さらに、弁護士として一番イライラしたのは、こういう場合の機長と航空保安官の権限の分配がわからないこと。そんな中で「犯人」から提示された1億5,000万ドルの振込口座の名義が何とビルのものだということが明らかにされたから、ビルはもちろん機長や副機長もビックリ！さらに、乗客名簿を調べた運輸保安局からビルに対して、「全員問題ない、お前以外は、お前を任務から解く」と通告されたから大変。それを知った機長は、その命令に従ってビルを拘束すべきが当然だ。ところがスクリーン上は、それとは全く違う展開に……。

そればかりか、狭い操縦席の中でビルと言い争った機長が何と「第二の犠牲者」になってしまったから、事態はより複雑に、そしてより深刻に……。ハイジャック犯はやはり、怪しげな乗客の誰かではなく、ビル自身……？

■□■犯人判明後は、凡庸な展開に。それに代わる面白さは？■□■

上空12,000mの密室モノは、潜水艦モノや列車モノと同じように面白い！ノンストップで展開していく「犯人は誰だ？」のスリルとサスペンスは巧妙に仕込まれているだけに、飽きさせることはない。12,000m上空の密室の中で、「1億5,000万ドルを送金しなければ20分ごとに機内の誰かが死んでいく」というメッセージどおりのことが、なぜかホントに次々と実現していくのだから、こりゃ面白いのが当然。しかして、犯人は誰……？それをここに書くことができないのも、当然だ。

もし、あなたが一瞬たりともビルをホントのハイジャック犯かもしれないと疑ったとすれば、あなたは映画通とはいえない。なぜなら、そんな作り方をする映画はありえないから。ビルをハイジャック犯に仕立て上げようとするのは真犯人をわからなくさせるための最大のテクニックだ。

しかして、本作は犯人の姿が明らかになり、かつ犯人の動機や狙いが語られ始めると、たちまち凡庸な展開になってしまうが、それは仕方ない。本作が立派なのは、それ以降は犯人捜しの妙というテーマから、爆発物の爆発時刻が迫る中、いかに飛行機を緊急着陸させ、乗客の命を救うかというテーマに移行していくことだ。

運輸保安局が要請した2機の戦闘機は、爆発の衝撃を小さく少しでも安全に着陸するため、本機が高度を8,000mに下げることが断固拒否。そんな行動をとればすぐに撃墜すると通告したが、さて機長なき今、本機の操縦桿を握る副機長の決断は？犯人判明後は、急にビルがスーパーマンのような万能の男になってしまうのは少し違和感があるが、これもノンストップの展開を維持するためには、やむなし？そんな視点で、前半の犯人捜しとは趣の異なる、結末までのスリルとサスペンスを楽しみたい。

2014（平成26）年7月11日記